「日本のサッカーを変えるには、１２歳以下の指導から変わっていく必要がある。」

名古屋グランパスエイト元監督Ａ・ベンゲル氏が、帰国の際に残した言葉です。

これは、現在の指導が悪いというのではなく、サッカー選手の育成にとって、もっとも大切なゴールデンエイジと呼ばれる年代（９～１２歳頃）にさまざまなことを身につけておかなくては、選手としてその後の成長に影響するという意味ではないでしょうか。また、氏はサッカーの技術や戦術だけでなく、人間性も含めたものを身につけなくておかなくては、将来一流の選手になれないということも言いたかったのではないかと思います。

～　サッカー指導教本１９９８年度版より

前回、ユース年代(小・中・高校生)のサッカーの目的は「勝つことではなくて、選手一人一人の能力を高めること」と書きました。最近では、講習会を受講しているコーチが、チームの勝利は大切だが、それよりも選手を育てることが大切と言ってくれるようになりました。日本も指導者養成システム（公認Ｓ～Ｄ級コーチ）が確立し、情報が少しずつ行き渡るようになってきました。確かに釧路でも 10 年前よりは、一人一人の選手のレベルは上がりましたが、それ以上にこの 10 年間で日本全体のレベルが上がりました。釧路においても、選手を育成していくシステムや環境を早急に整えていく必要があります。

大会などを見ていると相変わらず勝利だけにこだわるチームが多いのは保護者やコーチが勝つことでだけに気を取られすぎているからです。そういう保護者やコーチはチームの結果（勝ち負け）という物差しだけですべてを判断してしまいがちです。子どもは試合に勝ちたい、もちろんそれは勝たせてあげられるのがいいのだけれど、コーチのロボットをつくって勝たせる（ＦＷに大きくて足の速い選手を張り付かせておいてロングボールを蹴るとか、相手がボールを持ったら常に 2・3 人で奪いにいくとか、当たり前に戦術として小学生にさせているチームもあって、効果があったりする。）のではなくて、子ども自身が勝つためにどうプレーするか、考えられるようにすればいい。大切なのは、子ども自身が考えてプレーすることです。後になって子どもも指導者も保護者も気づくと思いますが、小学生年代において強いことがいい選手を生む土壌にはならないことも多いのです。釧路のサッカーする子どもたちのためによい環境（子どもたち一人一人のプレーを大切にする「サッカーの文化」）をつくっていくことが大切だと思います。

「鳥を歌わせる、踊らせるのは簡単（ボールがひとつあればよい）。」

～　クロード・デュソー（JFA ﾃｸﾆｶﾙｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ）

子どもたちは、ゲームが大好きです。だから、たくさんゲームをさせることが大切です。（50%はゲームに。ただし、サッカーのゲームは 11 対 11 だけではありません。ボールと相手とゴールがあれば、それはゲームです。）

JFA アカデミー福島のゲームのやり方を見ていると、決して DF の背後にボールを蹴りません。（コーチは DF の背後に蹴るなとは言わないし、また、蹴れとも言いません。）選手は、DF からギャップにパスを通し、丁寧に相手ゴールまで運んでいきます。この年代に必要なことを身につけよう、身につけさせようとする意図が感じられます。

コーチは、子どもたちに楽しさを伝える中に「サッカーの基本」を身につけさせなければなりません。コーチは、ゲームのやり方やゲームのオーガナイズ（ピッチの広さ、人数、ゴールの数、ルール等）を通して、子どもたちに必要なことを身につけさせていく必要があります。

どんなトレーニングをしているかは、ＪＦＡアカデミー福島のＨＰに載ってます。ダイアリーも我々コーチにとって非常に興味深い内容です。こまめにチェックすることをお奨めします。（　→　http://www.jfa-academy.jp/fukushima/boys/index.html）

より「サッカーが楽しい」ためには、子どもたちが「ボールと友達になる」（by 大空翼：パーフェクトスキルを身につける）ことや「サッカーの基本」を身につける必要があります。それはただサッカーをしているだけで身に付くものばかりではありません。別にロベルト本郷でなくともコーチにはなれますが、子どもたちが U-12 年代までに「ボールと友達になる」ことができないと中学校へ行ってサッカーがつまらなくなるかもしれません。子どもたちに「サッカーの楽しさ」を伝える、それにはまず、コーチ自身が「サッカー」を知り、コーチングの基本を学んでいく必要があります。

テクニカルアドバイザー
クロード・
デュソー